

2018年度 文教大学生生活科学研究所

公開講座記録

開催期間 2018年10月27日(土)

会場 文教大学越谷校舎13号館13101教室

開会の挨拶 研究所所長 金藤 ふゆ子
進行・まとめ 研修部主任 二宮 雅也

テーマ「スポーツボランティアシンポジウム」

～メガ・スポーツイベントボランティアの魅力へ迫る～

生活科学研究所は、人間の生活にかかわる様々な事象や課題を学術的に研究する目的で1976年に設立され、人々の生活向上及び地域社会や教育の発展に貢献することを目的として公開講座を開催してきました。今年、2020年に行われる東京オリンピック・パラリンピックをはじめ、近年行われるメガ・スポーツイベントの開催を前に、「スポーツボランティアシンポジウム～メガ・スポーツイベントボランティアの魅力へ迫る～」をテーマとした公開講座を開催しました。メガ・スポーツイベントボランティアの魅力とは何なのかについて、本学人間科学部人間科学科の二宮雅也准教授の講演、そして、リオパラリンピック銅メダリストの芦田創氏を含む識者、ボランティア実践者4名でシンポジウムを行いました。

第一部：講演「ボランティアが作りあげる 2020 東京大会とは」

二宮雅也（文教大学人間科学部）

第二部：シンポジウム

登壇者：芦田創氏、竹澤正剛氏、水野遥夏氏

コーディネーター：二宮雅也准教授

主催：文教大学生生活科学研究所

後援：埼玉県教育委員会・越谷市教育委員会・草加市教育委員会・春日部市教育委員会

協力：日本財団ボランティアサポートセンター

第一部：講演「ボランティアがつくりあげる 2020 東京大会とは」

文教大学人間科学部
二 宮 雅 也

1 オリンピックのはじまりーボランティア意義を考えるー

2020年東京大会は、大会ボランティア、各都市ボランティア合わせて約12万人が活動します。これだけ大人数のボランティアが支える大会ですが、その大会の哲学はどこにあるのでしょうか。まずは、大会の歴史を振り返りながら、ボランティアが支える大会の意味や意義について考えてみたいと思います。

今から2,800年も前のギリシャでは「古代オリンピック」が開催されていました。古代オリンピックは4年に一度、オリンピアという都市で開催されていたため、これが「オリンピック」という名前の由来になっています。争いが絶えなかった古代ギリシャで、休戦を促すために4年に1度競技大会を開いたのが古代オリンピックの始まりだといわれています。このモデルに倣い、近代社会にオリンピックを復興したのが、フランスのピエール・ド・クーベルタンです。クーベルタンが生きた時代は、まさにヨーロッパの各国が植民地主義のなかで鬭争を繰り返している時代でした。その中で、クーベルタンは「スポーツと芸術を通して調和のとれた人間を育て、世界平和に貢献する」ことを提唱し、オリンピック大会を復興してオリンピックの理念（オリンピズム）の普及を目指しました。

オリンピズムとは「肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする」という考え方です。つまり、オリンピズムとは生き方の哲学で、目的は平和な社会の構築に寄与すること、スポーツを人類の調和の取れた発展に役立たせることになります。この頃、日本では東京高等師範学校の校長であった嘉納治五郎が柔道を通じて、国内でスポーツ教育を実践していました。これに共感したクーベルタンは、アジア初のIOC委員として嘉納を推薦し、日本のオリンピック参加を呼びかけたのです。そして、1912年のストックホルム大会にて日本人が初めてオリンピックに出場することになりました。

さらに、アジアでのオリンピック開催が、平和の観点からも重要であることを訴え、嘉納の努力により、1936年のIOC総会で1940年東京大会開催が決まりました。しかし、嘉納は逝去し日本は日中戦争のため1938年に大会を返上することとなり、「幻の東京オリンピック」となりました。その後、多くの人々の想いと努力で1964年に東京オリンピック実現しますが、そこに至るまでには実に26年もの歳月がかかったわけです。多くのボランティアが支える2020東京大会はこうした歴史の上に成り立っています。単なるスポーツの祭典としてではなく、各国から集まる多くのボランティアと一緒に活動することも、最大の目的である「平和」を考える意味でもとても重要なのです。

2 パラリンピックから学ぶものとは

ボランティアが支えるもう一つの大会が、パラリンピックになります。パラリンピックは障がい者スポーツの最大のイベントですが、この大会を支える本質的な意味も「平和」に関係しています。

パラリンピックの父と呼ばれるルートヴィヒ・グットマンは、第二次世界大戦で傷ついた兵士のリハビリテーションの手段としてスポーツを活用し、入院患者を対象に、アーチェリーによる競技大会を開催しました。これは1948年に開催されたロンドンオリンピックの開会式と同日で

あったことを考えると、グットマンの思想が伺えます。パラリンピック（Paralympic）は、元来、paraplegia（＝対まひ）とOlympic とからの造語でありましたが、現在では「パラ＝対等」という意味でオリンピックと並行した大会に成長しました。

1964年東京オリンピックの直後には、「国際身体障害者スポーツ大会」が開催されました。この大会で初めてOlympic=Paralympicという発想が用いられることとなります。大会では日本を含めて22カ国、約350人の選手が参加しました。当時の報道によれば、イギリスでは身体に障がいのある方の社会復帰率が95%であるのに対し、日本は50%未満であり、しかも、雇用者は28%にすぎなかったとされています。日本人選手や当時ボランティアとして活動した「奉仕団」の多くは、海外の選手と交流する中で、日本と海外の障がいに対する考え方、あるいは当事者の生き方の違いを実感したと言われています。

2020年に開催される東京は、世界で初めて2回目の開催都市ということになるわけです。56年という時を経て開催される2度目のパラリンピックは、まさに我が国の障がい者施策をはじめとして、その変遷と実態を検証する大切な機会でもあり、さらに、さまざまな観点において世界から注目（比較）されることにもなります。特に、多くのボランティアが競技補助や各種活動を通して、各国の選手や関係者と交流することで、さまざまな「気づき」を得ることになるでしょう。パラリンピックは、スポーツを通じた国際交流だけでなく、グローバルな視点で「ダイバーシティ」について気づき・考える契機として意義深い大会なのです。

また最近の大会では、世界各地で続いている紛争等により負傷した元兵士が選手として活躍する事例も数多くみられます。パラリンピックのはじまりが入院していた傷痍軍人が対象であったとするならば、残念ながら現代社会でも争いで傷ついた兵士が戻ってくる場になっているという、悲しい現実があります。まさに、パラリンピックからも「平和」を唱えなければならないのです。

3 2020年東京大会とボランティア

東京大会は、「スポーツには世界と未来を変える力がある」というスローガンをもとに開催されます。これは、「すべての人が自己ベストを目指し（全員が自己ベスト）」、「一人ひとりが互いを認め合い（多様性と調和）」、「そして未来につなげよう（未来への継承）」の3つのコンセプトから成り立っています。これは、選手、ボランティア、観客を含めすべての人を含んで初めて達成される目標となります。その中でも、ボランティア活動を通じて達成される側面は多々あります。大会におけるボランティア活動は、常に「さまざまな状況の変化の中で、誰の何の望みをかなえているのか？」ということがポイントになります。国内の地方から、海外から、お年寄りから子どもまで、さまざまな障がいを抱えた人も含めて、多様な人が会場に訪れます。この状況を想定した時に、ボランティアにはまさに個々の困りごとに対するきめ細やかなサポートが求められます。つまり、多様性に配慮したボランティアパフォーマンスが必要になるわけです。これはボランティア同士が連携し、それぞれのベストを発揮しながらクリアすることでしか成し遂げられません。また、ボランティアも、国籍、年齢、性別、障がいの有無を含め多様な人で構成されています。ですから、それぞれの強みを活かした活動を連携して行うことでさまざまなニーズに対応することができるわけです。そしてそこで経験されたことが、まさに「未来に継承」されなければならないダイバーシティに対する理解と、それを前提としたインクルーシブな社会の実現につながります。

私が昨年開催された平昌冬季大会であった大学生ボランティアも、脳性麻痺の障がいがあり、電動車椅子で活動していました。彼にインタビューした時に、「いつもは助けてもらうことが多いけど、自分も何かの役に立てればいい」と率直に話してくれたことが非常に印象的でした。

障がいの有無に関わらず、自分の力を最大限に発揮して活動することにこそ、ボランティア本質的な意味を感じたわけです。この大会を通じて展開されるボランティア活動からさまざまな気づきが生まれることにも期待したいと思います。

4 ボランティアレガシー構築のために

東京 2020 大会の競技開催地は東京だけではありません。北から、北海道、宮城、福島、埼玉、千葉、神奈川とさまざまな地方都市で開催されます。それぞれの開催地では、独自のボランティア計画が立てられ、都市ボランティアや開催地独自のボランティアが募集される予定です。2012年のロンドン大会では、各地のボランティアは「地域名+アンバサダー（大使）」の呼称で活動を行いました。この統一感のある呼称は、地域名が入ることで地域アイデンティティを高め、また「アンバサダー（大使）」と称されることによって、それぞれが誇りと主体性を持った活動を可能にしました。大会後も、アンバサダーの情報は行政ごとにデータベース化され、随時ボランティア情報が提供されることにより、様々な分野でボランティア活動の継続がなされています。また、ロンドンでは、大会ボランティアであるゲームズ・メーカーの登録者リストを基にボランティア組織である「Join In」が設立され、引き続きボランティア活動を継続できるよう、マッチングサイトが運営されています。

我が国のボランティア文化は、1995年の阪神淡路大震災や2011年の東日本大地震のような、各地で度重なり発生している災害とともに発展してきたと言っても過言ではありません。よって、ボランティアイメージも災害弱者をはじめとして、困っている人や社会的な課題を解決するというイメージが強固になっています。少子高齢化が進み人口減少が激しさを増す今日において、今後の明るい社会モデルをイメージすることは非常に難しい状況です。しかし、地域に目を向けるとボランティアを主体としたさまざまな社会活動が成立しています。そして、活動を継続している要因は、「人のために～する」という文脈だけでなく、「自分のためにも～する」という自己実現的要素も大きいことが各種調査等でも明らかになってきています。こうした自分のためのボランティアが結果的に社会的・公益的な活動になるならば、それはこれからの社会にとっても貴重な活動となります。計画では今回の東京 2020 大会において、大会ボランティア・都市ボランティア（各地方都市も含める）と約 12 万人程度のボランティアが期間中活躍することになっています。東京 2020 大会をきっかけに人生で初めてボランティア活動を行う人も多数いるでしょう。このボランティアらが、今後もさまざまな場所で多様な活動を継続することを通じて、自己の満足を高め、また社会にとって利益の高い結果をもたらすならば、それは東京 2020 大会の素晴らしいレガシーとなるはずです。

第二部：シンポジウム

登壇者：芦田創 氏、竹澤正剛 氏、水野遥夏 氏

コーディネーター：二宮雅也准教授

（以下、敬称略で表記）

二宮雅也：芦田選手はボランティアの意義や意味をどのようにお考えですか。

芦田創：プライベートで視覚に障がいがある方の「伴走ボランティア」というのをしています。

はじめは簡単だと思っていましたが、実際には陸上ではあるけども種目が異なるので、反対にばくが伴走される側になっていて引張られていました。その時に感じたのは、自分の中では目が見えない人をちょっとなめていたんじゃないかということです。「自分は現役バリバリで

メダルも狙える選手」みたいなプライドがズタボロにされました。ですが、そういう経験から自分の中で新しい世界観というのが開かれて、ボランティアもそうですけど何か新しいことをすると新しい自分がみつかるというのがあって、そういう意味でスポーツボランティアは大きな意味があると思います。だからこそ、アスリートにもこういう活動が大事だと思うし、むしろ日本代表選手も一度はボランティアやろうみたいな動きになったら、2020以降も盛り上がってくるのではないかなと思いました。

二宮雅也：芦田選手はこれまで国際的な大会にも出場されていますけどもその中で印象的なボランティアとの出会いはありましたか。

芦田創：色々な大会で仲良くなって連絡先を交換して、その後も繋がっているというのはありますね。それで美味しい料理屋を教えてもらったりするということがあります。他にも完璧なコミュニケーションを取れるというわけではないですが、お互いに言語を教えあうということもあります。この前のジャカルタ大会でインドネシア語を教えてもらったのですが、もう忘れてしまいました。数字を教えあたりしましたがそういうやり取り自体は思い出に残ったりしています。

二宮雅也：芦田選手はボランティアにこんなスキルや要素があったらいいなと思うことはありますか。

芦田創：リオのボランティアがすごく印象に残っています。とにかく、あの暑さの中での試合でしたが、応援と人の温かさに助けられました。そういうところで人の良さに触れることができた大会がリオでした。ボランティアに求められる要素としては、サポート感覚についてです。例えば、電車の中でお年寄りに席を譲るという感覚や、妊婦さんに席を譲るような感覚です。譲った方がいいのかな、どっちなのだろうなという場面がボランティアに多くあると思います。車椅子を押してあげた方がいいのか、いやこの人は自分で行きたいのか、それをその都度考えることが正解なのではないかなと思います。つまり、一つの正解とか世界観の中で押し切ることができないということです。特に、パラリンピック期間にボランティアが選手村や競技会場に行くと、突如健常者の感覚がマイノリティに変わるってということが起きます。そんな世界観も楽しんでほしいなと思います。

二宮雅也：それぞれの真のニーズに気づくということがポイントになるのかなと思います。ニーズに気づいてそれをやってあげて喜ばれるというのは、ボランティアの醍醐味だと思いますし経験になるのかなと思いますが、竹澤さんはそのあたりどのように思いますか。

竹澤正剛：ニーズに気づくというのは、聞こえは良い言葉なのですが実ははっきりと聞いてあげることの方が大切ではないかと思います。僕はリオに行く前までは、先に考えて行動することが良いことだと思っていたのですが、国際大会では相手の人が日本人ではないという環境下ということもあり、何がニーズであるかをしっかりと聞き取ってあげることが大切だと感じました。それで障がいのある方をサポートする時もそうですけども、まずは「May I help you?」と言えるかどうか、そういう気持ちを一步出せるかどうかの方が大事なのではないかなと思います。ですから、ニーズを察することも大切ですが、まずははっきりと相手のニーズを聞いてあげることも大切なのではないかと最近思うようになりました。

二宮雅也：ニーズを聞かれて答えるというのはある意味当然だとは思いますが、聞かれたから素直にニーズというのは出てくるでしょうか。

芦田創：そこが難しいですよ。そこがシンプルな社会はいい社会ですよ。そこがギクシャクしてしまうということは、気遣いだったり変な上下関係だたりが生まれている世界なのかなと思います。明確な答えはないですけど、僕は自分のニーズを素直に言える選手でありたいと思っています。

二宮雅也：明確な答えはないのだけれども、そういう社会になったらいいなという理想をイメー

ジしつつ、その難しさに直面することがボランティアであり、おそらくこれはスポーツボランティアだけに限らず、様々な領域のボランティアの一番難しいところですね。「何かお手伝いすることはありますか」と聞いて、それが100%の答えを頂ければ来ればこちらもちよき活動が出来るのだけれど、その帰ってきた返事が本当に100%なのかどうかというのは誰にも判断ができない。それが本当に叶うことになれば、お互いが気持ちいいお互いが嬉しいと感じるボランティア活動になるのかなと思います。水野さんは、2020年の都市ボランティアを希望しておられますが、都市ボランティアでは何が重要だと想像していますか。

水野遥夏：都市ボランティアでは地理的感覚が重要だと思います。近所の普段から列を作っているバス停では、オリンピックとかパラリンピック時にはもっと長い列になると思います。例えば、長蛇の列に並んで待っている時に、もしトイレに行きたくなったら地元の人ならどこにトイレがあるかわかりますけど、おそらくボランティアでたまたまその場所で活動している人には、わからないかもしれません。普段から、そういった要素は必要なだから抑えておく必要があると思います。何がニーズとして求められるかを事前に知っておくことは必要だと思います。

二宮雅也：初めてその都市を訪れた人たちが、ボランティアの支えによって幸せな時間を過ごせるかどうかという点において都市ボランティアは、重要なカギを握ると思います。大会ボランティアは大会会場の中で活動することが多いので、直接的なサポートをすることになります。実は観客の満足度を考えると、会場の中にいることよりも知らない土地で生活することに対して不安感があるので、安心感を与えるボランティアがたくさんいると、おそらくこの大会に来てよかったなという印象につながるのではないかと思います。最後に3人にお伺いしたいのですが、2020年にオリンピック、パラリンピックがありますが、想いを聞かせていただいてもよいでしょうか。

竹澤正剛：2020年と言っているものの2020年以降も私たちの生活は続きます。だから考え方としては2020年に何をやるのかということよりも、2020年以降にこんなことをしたいから2020年をどのように使うのかということが大切になります。2016年に2週間会社を休みリオに行きました。たった2週間ですよ、オリンピックって。もちろんパラリンピックを入れるともう少し長くなります。でも、皆さんの人生において1か月2か月ってどのくらいでしょうか。そこはすごく忘れてはいけないところだなと思っていて、先ほど都市ボランティアの話でもありましたが、要は2020年に都市ボランティアをやったことが終わりなのではなくて、2020年の都市ボランティアをやったことによってその地域を知る、街を知る、でその地域と町を好きになって、もっと言うて来てくださった方々が「あの街ってよかったよね」「あのバス停の目の前の定食屋がうまかったよね」「あそこすごいインスタ映えしたよね」とか、そういう情報が集まって「日本っていいところだったよね」「日本の大会よかったよね」「また日本に来たいな」と思うことが、2020年のあるべき成功の姿なのかなと思っています。

水野遥夏：竹澤さんもおっしゃっていましたが、私も2020年をきっかけにして欲しいと思っています。まだスポーツボランティアをやったことがない人も、既にやっている方も、より楽しくスポーツに関わっていただける機会になる始まりだと思っています。特に若い人ですよ。私活動している時に、同世代の人に会う機会ってほとんどなくて。さいたま国際マラソンや東京マラソンはまだしも、地域の小さい大会とかに行くほとんど高齢の方ばかりです。同世代がないというのがあって、もう少し同世代の若い人と活動したいというのがあります。全ての人が活動できるのがスポーツボランティアだと思っているので、これをきっかけに今後につなげていける大会になればいいのではないかなと思っています。

芦田創：日本でいろんな社会問題がある中で、2020がこれだけ注目されるということは、その先の社会に向けたリスタートじゃないですけど、通過点という意味が大きいのではないかと

思っております。絶対に金メダルをとるという意識で日々やっていて、ここあと二年間でどれだけ頑張るやろうかなというのは選手としての想いです。そういう精神状態の中で頑張っているということを、応援してもらえたら僕もパワーになるので、嬉しく思います。しかし、アスリートがスポーツばかりやっているとダメなんじゃないかと思っております。なぜかと言うと、確かに私は7メートルを飛ぶことができます。大きな水たまりがあったらそれを飛び越えることができます。ですが、身体能力が普通の人よりもちょっと優れているだけの人間なのであって、別にアスリートは偉いわけでも雲の上の存在でもないのです。ですからアスリートがメインすぎる大会はダメだと思うのです。大会から社会的な意味とか価値を見出せるかが、ネクストアスリートに必要なポイントだと思っています。私は障がいを持っていますが、でも自分は障がい者を代弁できるといいたいわけではありません。ただ、障がい者の本質までわかったわけではないですけど、オリンピックというトップスポーツの祭典ではなくて、ある意味パラリンピックという別のゲームに参加できて、その世界で負けることは言い訳だと言い聞かせているという自分の価値観を伝えることは大事だと思っています。そこにはすごい葛藤があります。自分がハンデを背負わないでいた時の人生とハンデを背負ってからの人生だと、やっぱり見える世界も違うし葛藤もあります。その中で世界の一番を目指している所に多分、意味はあるので、ぼくは7メートルを超えて、腕の障がい者の中で自分はトップだという自信満々の角度から見えた世界を社会に切り込んでいくことが、新しい世界を作るのではないか、そんなことを期待しながら待ち遠しく今頑張っています。そういう意味において、これからはスポーツ選手が社会の風潮を変えていくことが僕は必要だと思うし、そんな2020大会になったらいいなと僕は思います。より良い社会に向けて、いろんな角度から関わることができたら良いのではないかなと思います。応援よろしくお願ひします。